

中世浄土宗の実態——法然浄土教からの乖離——

伊藤 真昭

はじめに

近世の浄土宗は、一六九六年段階で、すでに六〇〇〇ヶ寺を越える寺院数を擁していたことが明らかになっている。本稿の課題は中世浄土宗寺院の実態であるが、外形的にそれだけの寺院数の教団にいたる道筋を示すとともに、内実についてもその一端を紹介したいと思う。

先ず本稿では中世の始点を便宜上一一七五年の立教開宗時点、終点を一五六八年の織田信長上洛時点とする。一七五年は歴史的な時代区分でいうと院政期にあたるが、院政期は中世に区分される。この約四〇〇年間を中世として、一三三三年の鎌倉幕府滅亡までを中世前期、一四六七年の応仁・文明の乱までを中世後期、それ以降を戦国期として、それぞれの特徴をみていきたい。またその後の時代を、一五六八年から一五九九年までを織豊期、関ヶ原の戦いの一六〇〇年から三代将軍徳川家光が没する翌年一六五一年までを近世最初期、一六五二年から『浄土宗寺院由緒書』が作成される一六九六年までを近世初期とする。

浄土宗寺院の歴史を知るための基本史料が、知恩院蔵『蓮門精舎旧詞』（『浄土宗全書』所収）と、増上寺蔵『浄土宗寺院由緒書』（『増上寺史料集』）である。両者は密接に関係し、前者は後者の抄出本である。前者には竹田聴洲（竹田一九七二）による詳細な研究があり、後者には『増上寺史料集』として刊行される際、宇高良哲による詳細な解題が付された（宇高一九八〇）。それによると、増上寺には「尾張・三河」、「紀伊坤」、「備中・備前・備後・美作」の三冊が行方不明であるため、この部分は知恩院本の内容が掲載されたという。しかしそこでも指摘されているように、知恩院本は増上寺本の抄録であるため、全ての項目が記載されているわけではなかった。特に三河は中世浄土宗史にとって非常に重要な地域であるため、その欠本が惜しまれる。

ところが二〇一三年、愛知県岡崎市美術博物館から「三河国浄土宗寺院由緒書」が翻刻、刊行された（堀江二〇一三）。これは岡崎市信光明寺に残されていたもので、三河国内一五一ヶ寺分の情報が記載されている。また尾張国分についても名古屋市中建中寺に残されていたものが公刊された（宇高二〇一九）。

このように『浄土宗寺院由緒書』から漏れていた国の控えが発掘され、元禄の調査の全貌がより充実してきた状況にある。そのため近年の史料も加味した上での再検討が必要となろう。そこで本稿では、増上寺本を基本に、知恩院本・信光明寺本・建中寺本を加えて、重複分を削除した六六七二ヶ寺分を検討素材にして中世浄土宗寺院の成り立ちについて再検討する。なおここでいう「浄土宗寺院」には、浄土宗寺院として開基されたものだけでなく、他宗寺院としての前史があり、どこかの時点で浄土宗寺院として再出発したものも含めている。

表1 元禄年間浄土宗寺院数国別一覧

	国名	寺院数	合計		国名	寺院数	合計
九州	薩摩	8	544	北陸	和泉	184	254
	大隅	5			河内	35	
	日向	32			山城	512	
	肥後	61			京	140	
	肥前	149			近江	517	
	対馬	8			紀伊	236	
	豊後	53			若狭	11	
	豊前	36			越前	77	
	土佐	57			加賀	20	
	伊予	58			能登	12	
中四国	阿波	13	556	東海	越中	20	930
	讃岐	21			越後	78	
	長門	41			佐渡	36	
	周防	124			伊賀	63	
	安芸	41			志摩	8	
	備後	30			伊勢	351	
	備中	19			飛騨	4	
	備前	11			美濃	36	
	美作	12			尾張	144	
	石見	49			三河	154	
	隠岐	15			駿河	104	
	出雲	25			遠江	なし	
	伯耆	19			伊豆	66	
	因幡	21			信濃	202	1439
	但馬	38	2467	関東	甲斐	139	
近畿	播磨	50			相模	197	
	丹後	20			武蔵	264	
	丹波	92			江戸	243	
	淡路	3			上野	47	
	摂津	234			下野	46	
	大坂	108			安房	39	
	大和	298			上総	40	
					下総	156	
					常陸	66	
	小計	1943		東北	出羽	125	482
					陸奥	357	
					小計	4729	6672

まず表1と図1をご覧いただきたい。六六七二ヶ寺を国別に集計し、現在の浄土宗で採用されているブロック別に区分けたものが表1で、それをグラフ化したものが図1である。ここでは、江戸・京・大坂をそれぞれ武蔵・山城・摂津から独立させている。歴史的にもこの地域は幕府直轄地で区別されているからである。

表1では、山城・近江がそれぞれ五〇〇ヶ寺を越え最も多い。続いて陸奥・伊勢の三〇〇ヶ寺台、大和・武蔵・

第一章 近世初頭の教線拡大期

江戸・紀伊・摂津・信濃が二〇〇ヶ寺台で続く。もう少し広く地区別でみると、図1のように近畿・関東・東海の順になっている。それでは、どのような歴史的な経緯を経て、このようになったのであろうか。

検討する際、行基開創の由緒をもつ寺院など、一一七五年の開宗以前を開基年とする寺院も存在するが、開宗前に浄土宗寺院ではありえないので、ここではそれらを除外する。また開創時期を、例えば「慶長年中」というように年号で幅を持たせて記載されている場合があるが、これでは年次を特定できないため、これも除外する。その結果開創年次が明確な寺院が六六七二ヶ寺中三四八〇ヶ寺あり、それを五年ごとにグラフ化したものが図2である。

この点についての先行研究としては、先述の竹田聰洲の研究がある。その結果は、六三一五ヶ寺中、開創・中興年代が記載されている寺院が三九九〇ヶ寺あり、さらにそのうち天正から寛永（一五七三～一六四三）の七一年間に六三・五％に当たる二三三五ヶ寺が浄土宗寺院として起立されたというものであった。この研究では年号別の分析であるが、ここではより細かく年次で検討する。

その結果本稿での時期区分でも織豊期以降、一六九六年までの一二九年間に開基した浄土宗寺院は二六六ヶ寺あるのに対して、一一七五年から一五六七年までの三九三年間に開基したのは八一四ヶ寺である。前者が年平均二一ヶ寺であるのに対し、後者は年平均二ヶ寺で、その差は一〇倍以上ある。ここからわかることは浄土宗は近世に急激に膨張した宗派であるということである。

さらに詳しく一四五一年から一六九五年までの二四五年間の、五年ごと寺院開基数の推移が図3である。これによると一四五一年以降緩やかに寺院数が増加しているが、一五五〇年頃から急激に増加し、一五九一年から一六三〇年まで、一五〇ヶ寺から二〇〇ヶ寺と高水準で推移していることがわかる。

この一五九一年はまさに豊臣秀吉が全国統一を果たし、戦国の争乱が終結した時期に当たる。日本経済史の研究

図 1 元禄期浄土宗寺院所在地

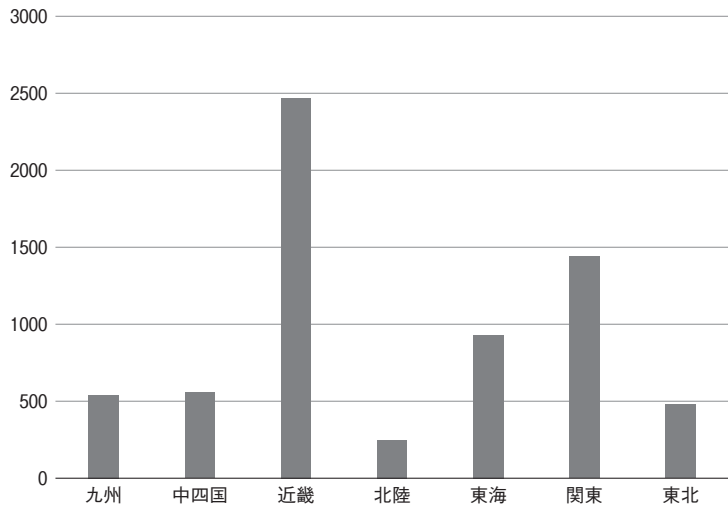


図 2 開創年次別寺院数

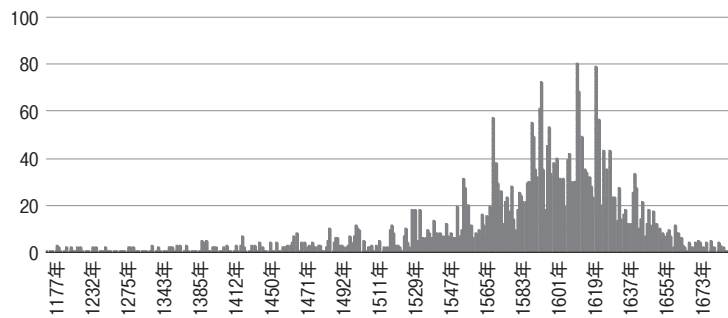
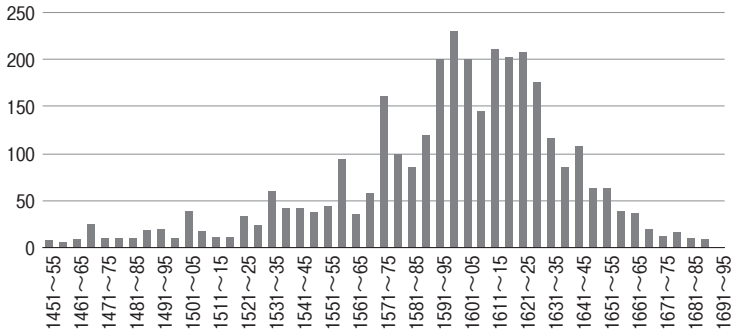


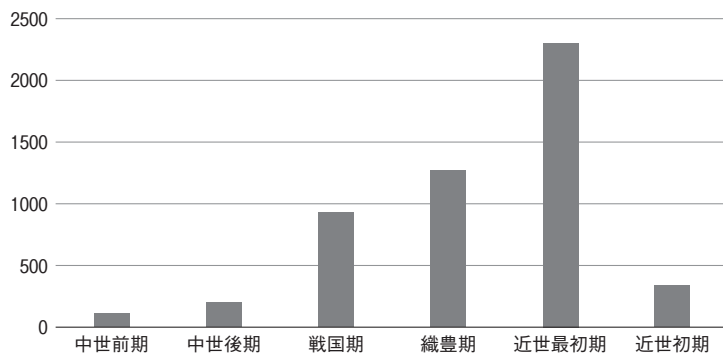
図3 5年ごと寺院成立数



成果でも一四五〇年に約一〇〇〇万人だった日本の人口が一六〇〇年には約一七〇〇万人に増加するが、その背景のひとつに一六世紀後半に飢饉発生頻度が急激に低下したことが指摘されている（斎藤修・高島正憲二〇一七）。戦国時代は戦乱による減少以上に人口が増加し、それに伴う経済発展に比例して、寺院数も増加したと考えられる。それに拍車をかけたのが豊臣秀吉の天下統一に伴う戦乱の終息であった。近畿では秀吉による大坂城・聚楽第・東山大仏・伏見城などの大規模公共工事は雇用を生み出し、人々の生活を潤し、そうした資金で寺院が建立されていたのであろう。

一六一五年に徳川家康から發布された浄土宗諸法度には「大小之新寺、為私不可致建立事」とあるが、これは「為私」、つまり勝手に新寺を建立することを禁止したのであって、許可を得たものや、昔あった寺院の復興（中興）はそこには含まれないことになる。そのためであろうか、図3からは一六三〇年まで法度の効果は認められない。その流れが止まるのは一六三一年以降である。この年には江戸幕府初めての本末改めが実施された（『諸宗末寺帳』）。浄土宗でも増上寺と檀林分が現存する。近江国でも少し遅れて一六三四年に知恩院から浄厳院に調査の指示が来ている（中井一九九四）ので、全国調査であったようだ。この調査は全宗派が対象ではないなど不十分なものであったが、幕府が全国の寺院を宗派毎に把握する姿勢

図4 時期別開基寺院数



を示したことで、ようやく寺院の増加に歯止めがかかったと思われる。

第二章 中世の浄土寺院

このように浄土宗は近世になってから急速に寺院数を拡大したのであるが、それでは中世段階での浄土宗の実態はどうであったのだろうか。いづごろ、どのあたりで浄土宗寺院が分布していたのかをみてみよう。

開基年次が明記してあるものが三四八〇ヶ寺あると述べたが、それに加えて例えば「〇〇年中」というように、年号の幅があるものの開基年代が判明するものがある。また開山の没年が明記してある場合もある。例えば和泉国堺の常安寺の場合、開基年も年代も不明であるが、開山である融誉浄円の没年が一六一三年とある。この場合融誉の没年齢は不詳であるが、寺院の開基が少なくとも一五七六年以前の中世に遡ることはないと判断できる。そのため常安寺の創建は近世最初期に分類できる。

こうして不明分一五〇八ヶ寺を除いた五一六四ヶ寺の開基時期を区分したものが図4である。そのうち中世前期・中世後期・戦国期の三時期に開基された寺院は、それぞれ一一八、一九八、九三七となり、戦国期から急

表2 国別中世開基寺院数

	中世前期	中世後期	戦国期
山城	16	6	65
京	4	1	23
近江	9	29	86
三河		12	79
相模	8	14	63
武蔵	7	13	45
下総	9	12	29
陸奥	8	10	68
合計	118	198	937

※上位5ヶ国を太字で表示

※合計は全国

東、④陸奥の四地域になろう。この四地域が中世浄土宗の拠点地域と考えられるので、以下個別にみていこう。

①山城・近江

中世前期で最も多い開基寺院数を擁するのが山城の一六ヶ寺である。郡別にみると宇治郡に七ヶ寺と集中している。そのうち六ヶ寺が慈心良空の開基と伝えられている。良空は良忠の弟子で、宇治郡木幡に尊勝寺（願行寺）を創建し、木幡派の祖となった人物である。この時期京中では四ヶ寺のみであるが、これはあくまでも元禄時に京中に存在したことを示しているだけで、中世前期に平安京エリアに存在したのかはさらなる検討が必要となる。

次に山城で中世後期に開基したと伝える寺院数はわずか六ヶ寺である。京中も一ヶ寺しかなく、寺院数の推移からは山城・京都での浄土宗勢力の停滞を指摘できよう。

増し、近世最初期にピークを迎えたことがわかる。その背景には先述のように戦国期の人口増加と経済成長があった。

次に各時期上位五カ国の寺院開基数をまとめたものが表2である。中世前期では山城、近江・下総、陸奥・相模の順、中世後期では近江、相模、武蔵、下総・三河の順、戦国期は近江、三河、陸奥、山城、相模の順である。このうち山城には京は含まれない。参考までに京のこの時期の寺院開基数も載せているが、京中には戦国期まで浄土宗寺院がほとんど存在しないに等しいことがわかる。これを地域的にくくると、

①山城・近江Ⅱ京都周縁、②三河、③相模・武蔵・下総Ⅱ関

表3 山城郡別寺院数

	中世前期	中世後期	戦国期
愛宕郡			5
葛野郡	1	4	10
乙訓郡			1
宇治郡	7		4
紀伊郡	2	2	8
久世郡	3		19
綴喜郡	2		16
相楽郡			1
西開戸村			1
三室村			1
合 計	16	6	65

しかしその状況は戦国期になると一変する。これは山城に限ったことではないが、山城では紀伊郡・久世郡・綴喜郡に多くの寺院開基が認められる。久世郡では槇嶋村・御牧郷に、綴喜郡では八幡にある程度の集中が確認できる。

戦国期の京でも二三ヶ寺の開基が確認できる。織豊期になると豊臣秀吉の京都改造により京中の寺院は寺町に集住させられることになるが、寺町の寺院はほとんどが日蓮宗と浄土宗である。これは戦国期の状況の反映である。というのもそれまであった寺院が寺町に集められたからである。戦国期の京は上京と下京に分かれ、それぞれ自衛のために堀と塀で構成される惣構えに囲まれていた。京には桓武天皇の平安遷都以来京中の寺院建立を禁止してい

たが、中世後期に日蓮宗寺院が上京に妙顕寺、下京に本国寺を建立して以来、京は有力商人を中心に日蓮宗信者が増えていった（河内二〇一三）が、寺院の規模が大きいのもあり、惣構えの内部には位置しなかった。一方当時の浄土宗寺院は上京・下京の惣構え内に存在し、法談を通じて信者を獲得し市中に根を張っていった。その成果は町名に現れる。現在でも「元法然寺町」「元百万遍町」「元浄花院町」の名が残る。戦国京都の浄土宗は市中に存在するほぼ唯一の宗派だとして、「都市型寺院」と評されている。（伊藤毅一九八九）。

一方、隣国の近江でも中世後期・戦国期には全国最多

表 4 近江郡別寺院数

	中世前期	浄厳院末	中世後期	浄厳院末	戦国期	浄厳院末
伊香郡					1	
浅井郡			1			
愛知郡			4	4	5	5
神崎郡	2	2	2	2	4	4
蒲生郡	2	2	7	7	25	23
野洲郡	1	1	1	1	10	8
栗太郡	3	1	2	2	19	14
甲賀郡	1		11	10	13	11
高島郡					1	
滋賀郡			1		8	
合 計	9	6	29	26	86	65

の寺院が開基している。表 4 によると、前期に湖東地域に浄土宗寺院が開基していくが、後期には愛知郡・甲賀郡とその南北にも広がりを見せた。後期開基の二九ヶ寺中安土浄厳院の末寺が二六ヶ寺と、近江の浄土宗寺院のほとんどが浄厳院の末寺であったことが確認できる。浄厳院自体は一四〇四年の開基であるから、中世前期に開基した六ヶ寺も末寺に組み込んでいったことになる。また浄厳院は戦国期の一五七七年に、織田信長によって蒲生郡安土城下に移転させられるまでは、栗太郡金勝山中に存在した。戦国期に蒲生郡・栗太郡で、またその中間地帯になる野洲郡での寺院開基が急増しているのにはそうしたことが関係していると思われる。浄厳院にとって安土移転は本末圏拡大の契機となった可能性が高いといえよう。

②三河

三河はこれまで増上寺本では存在が確認されず、また知恩院本も抄出であるために、詳しい検討がなされてこなかった。しかし信光明寺に増上寺に提出した控え『三

表5 三河郡別本寺別寺院数

	中世後期	戦国期	大樹寺	性源寺	信光明寺	洞泉寺	松応寺	知恩寺	悟真寺	大恩寺	城宝寺	合計
賀茂郡	2	16	12	2	1	1						16
額田郡	2	11	5		2		3	1				11
碧海郡	6	14	11					3				14
宝飯郡		25							4	21		25
幡豆郡		4	4									4
渥美郡	2	8							7		1	8
不明		1	1									1
合計	12	79	33	2	3	1	3	4	11	21	1	79

河国浄土宗寺院由緒書』が残っていることがわかったので、ここでその内容を検討してみよう。

開基当初より浄土宗寺院であったもので最古は碧海郡粟寺村清安寺である。開山は岌賢で、一三六一年の開基である。ただ岌賢については没年が一四二九年という以上のことはわからない。これが本当たとすると住職在任六九年となる。僧名に「岌」という字が使われていることから、藤田派に属した可能性がある。藤田派が三河に根を張っていたことは、藤田派四代唱名の弟子、善忠寂翁が渥美郡吉田悟真寺を一三六六年に開いたことよりもわかる。その他碧海郡中之郷村大聖寺開山月講照阿は「藤田慈阿^(持)上人之末流、三州藤田一派之古本寺」であり、一四二九年の開基という。その他蓮翁実賢が一三八二年に開基した碧海郡上野村行福寺、蓮花忠阿が一三九三年に開基した碧海郡上野村隣松寺、残夢覚阿が一四四六年に開基した渥美郡仁連木村大蓮寺も開山の僧名などから藤田派と思われる。そうだとすると中世後期一二ヶ寺中、半数の六ヶ寺が藤田派であった。一方、この時期の白旗派寺院で特筆すべきは、信光明寺の創建である。開山は釈誉存岡で、一四五一年に岩津城主の松平三

代信光が父泰親の菩提を弔うため建立した。境内の観音堂は現存する浄土宗寺院建造物としては最古のもので、一四七八年の造立であることが棟札から知られる。信光明寺は松平家の浄土宗帰依の始まりであり、知恩院が現在の姿となったのも、三河松平家との師檀関係に端を発する（伊藤真昭二〇一八）。

戦国期になると、三河では八ヶ寺の近江に次いで二番目に多い七ヶ寺が創建されている。三河浄土宗の中心寺院である大樹寺が一四六七年に、また同じ頃に大運寺（後に大恩寺）が創建されている。ともに白旗派了暁の弟子である愚底と訓公が開山となっている。両寺とも松平宗家四代目親忠がその創建に大きく関わっている。その影響で一四九七年には藤田派の悟真寺も白旗派知恩院の末寺になっていることが確認できる。表5によれば、元禄期の末寺数ではあるが、大樹寺が賀茂郡・碧海郡に、大恩寺が宝飯郡に、悟真寺が渥美郡・宝飯郡に多くの末寺を擁する。

このように三河浄土宗寺院の特徴は、松平家関係の寺院が多いことである。中世後期では賀茂郡松平郷高月院が松平家初代親氏の墓所となり、額田郡細川村松明院を大給松平家祖乗元が建立している。戦国期には大樹寺の他、同じく松平親忠創建と伝わるのが額田郡細川村蓮性寺、碧海郡桑子村真如寺、賀茂郡岩倉村春光院、碧海郡安城村了雲院である。さらに親忠三男長親創建と伝わるのが額田郡上大門村大円寺で、他にも深溝城主松平忠定の妻で、松平親長娘が創建した額田郡深溝村三光院などがある。徳川家康の祖父清康の代には、その弟松平康孝建立の碧海郡吉良浅井村源空院、家康の父広忠創建の碧海郡大浜村常行院、家康が「御伯母」のために建てた額田郡岡崎随念寺などがあり、これらは全て大樹寺の末寺に組み込まれている。

このように三河では山城・近江、相模に遅れて浄土宗が入ってきたが、松平家の帰依により、戦国期にかけて全国でも一、二を争う浄土宗寺院拡大地域となった。

なお戦国期には大樹寺から開山勢誉愚底が知恩院二二世に入山して以来、二三世肇誉訓公、二四世超誉存牛が三代続いて三河浄土宗から知恩院住職を輩出している。特に超誉存牛は松平家出身で、徳川幕府になってからの知恩院大規模拡張の下地となった。

③相模・武蔵・下総

表6では、相模国で中世前期の創建を伝えるのは八ヶ寺あるが、浄土宗僧侶が開山だと伝えるのは四ヶ寺である。このうち足柄下郡矢作村春光院の開山は弁長だとされるが、弁長が相模を訪れた史実はないので、伝説の域を脱しない。残る三ヶ寺では、創建年代順に、一二三五年から三八年に願行円満が開いたと伝える鎌倉郡名越郷安養院、一二七五年に四祖寂恵良暁開山の三浦郡芦名村浄楽寺、一三二三年に覚蓮社円阿安立開山の足柄下郡小田原山角町潮音寺である。

中世後期になると足柄下郡での寺院創建が顕著である。これには良暁の弟子である仏蓮社良誉定慧が一三五六年から六一年に開いた桑原道場浄蓮寺の存在が大きであろう。定慧は誉号の祖と言われるが、浄蓮寺以外の足柄下郡の一〇ヶ寺の開山には全て蓮社号と誉号が付いている。

戦国期では、三浦郡・鎌倉郡での寺院建立が顕著となる。特に三浦郡の三〇ヶ寺は開創時点からそうであるかは研究の余地があるが、元禄時点では全て鎌倉光明寺末である。三浦郡は開宗以前から元禄期まで全時代を含めても一ヶ寺以外全て光明寺末であり、その浸透度合いが注目される。光明寺膝下の鎌倉郡一二ヶ寺のうち光明寺末は六ヶ寺で、残りは知恩院末系となっている。ただこれもあくまで元禄時点での状況である。

次に下総は、中世前期に九ヶ寺の開創を伝える。そのうち二ヶ寺が良忠開基と伝える。また二ヶ寺が藤田派二代持阿、一ヶ寺が同派初代性心の開基と伝える。中世後期になると主要寺院の創建がみられる。一四一四年に飯沼弘

表 6 下総・武蔵・相模郡別寺院数

国名	郡名	中世前期	中世後期	戦国期	合 計
下 総	匝瑳郡	1		3	4
	香取郡	5		3	8
	相馬郡		3	2	5
	猿島郡	1	1	2	4
	豊田郡	1	1		2
	葛飾郡	1	7	19	27
	合計	9	12	29	50
武 蔵	榛沢郡	1			1
	比企郡			1	1
	埼玉郡	1	6	7	14
	足立郡	2	4	13	19
	入間郡			2	2
	多摩郡			4	4
	葛飾郡			2	2
	豊島郡		2	3	5
	荏原郡	1		6	7
	都筑郡	1		5	6
	橘樹郡	1		1	2
	久良岐郡		1	1	2
	合計	7	13	45	65
相 模	三浦郡	2	2	30	34
	鎌倉郡	3	1	12	16
	高座郡			4	4
	愛甲郡			3	3
	大住郡			7	7
	足柄下郡	3	11	7	21
	合計	8	14	63	85
	3ヶ国合計	24	39	137	200

経寺が良肇によって、一五一七年には愚底によって東漸寺が開かれている。また後に大沢円通寺の開山となる理本が一二九四年に葛飾郡坂戸村西福寺を開いている。戦国期になると葛飾郡での寺院創建が活発化する。これらは元禄期の本末関係では、飯沼弘経寺三ヶ寺、東漸寺二ヶ寺、残り一四ヶ寺は増上寺系の末寺であるが、戦国期に増上寺の影響力が拡大してきたことを示唆しているよう。

武蔵は、中世前期に鎌倉に近い都筑郡など南部地域と、足立郡・埼玉郡の内陸北部の二拠点があったが、中世後期になると、後者二郡に創建が集中する。戦国期にもその傾向は継続するが、それ以外の郡にも広がっていく様子もみてとれる。

④ 陸奥

陸奥は最も範囲が広いので、それだけ寺院数も多くなるが、その中でも中世前期創建寺院で中心となるのは、法然の弟子、隆寛ゆかりの会津会津耶麻郡三宮願成寺と、磐前郡山崎村如来寺・檜葉郡折木村成徳寺である。後者は名越派三世妙観と四世聖観がそれぞれ創建した名越派の中心寺院である。また一三〇二年良徳聖弁創建と伝える遠田郡浦谷馬場谷地村光明院も僧名から名越派の僧と思われる。このように奥州といっても南部の会津と、いわゆる浜通りが中心地帯となり、特に後者には名越派が根付いていた。中世後期以降もその傾向は続き、中世後期には一〇ヶ寺中会津に三ヶ寺、浜通りに七ヶ寺分布し、戦国期には六八ヶ寺中会津に二〇ヶ寺、浜通りに二八ヶ寺と、全体の七割がこの両地域に集中している。戦国期になると名越派は本州最北端の津軽郡にまで進出している。名越派は、元禄期の本末関係にはなるが、中世前期に八ヶ寺中四ヶ寺、中世後期に一〇ヶ寺中七ヶ寺、戦国期に六八ヶ寺中四九ヶ寺を占めている。陸奥はまさに名越派の独占地域であった。

表7 陸奥郡別寺院数

	中世前期	中世後期	戦国期	名越派
津軽郡			4	4
三戸郡	1		2	
糠部郡			1	
稗貫郡			3	3
紫波郡			1	1
胆沢郡	1			
栗原郡			1	1
遠田郡	1			
志太郡			1	1
黒川郡			1	1
亘理郡			1	1
伊具郡			1	1
行方郡		1	1	1
檜葉郡	1	3	2	2
磐前郡	1	3	22	22
菊田郡			3	3
白川郡			1	1
伊達郡			3	3
会津	3	3	20	4
合 計	8	10	68	49

第三章 寺院急増の悪影響

戦国期以降、寺院が急増することは、浄土宗の勢力が拡大したとする正の評価を下すことができる。しかしここではそれがもたらした負の側面についても検討しよう。現在でも人気商品を販売する会社が店舗数を急拡大した場

表8 非正規僧割合

国名	寺院数	非正規僧	割合
紀伊	236	202	86%
近江	517	312	60%
伊勢	351	193	55%
和泉	184	101	55%
山城	512	246	48%
大和	298	136	46%
摂津	234	102	44%
周防	124	41	33%
肥前	149	40	27%
筑前	139	28	20%
大坂	108	19	18%
下総	156	26	17%
信濃	202	26	13%
相模	197	25	13%
尾張	144	18	13%
駿河	104	12	12%
甲斐	139	16	12%
陸奥	357	40	11%
出羽	125	13	10%
三河	154	15	10%
武蔵	264	24	9%
京	140	10	7%
江戸	243	4	2%

※100ヶ寺以上の国のみ

※藤田派の「炭」や名越派の「良」が
付く僧は正規僧とした

合、店長となる人材教育が追いつかずに、かえって質の低下を招くことがある。同様に寺院が短期間に急増したことで、浄土宗にも同じことが起こった可能性がある。そもそも寺院ができるということは、そこに常駐する住職が必要になるということである。堂舎は短期間でできても、人材はすぐには育成できない。そのことを確認してみよう。戦国期以降成立の寺院四八八ヶ寺で誉号、または蓮社号が僧名に付いていない非正規僧が開山の事例が、各時期二〇％前後、五人に一人の割合ある。不明分の成立時期の八割を戦国期以降と仮定すると、その割合は三一％となり、全体ではおよそ三人に一人の割合になる。つまり戦国期以降三人に一人は伝法を受けていない、十分な修学を積んでいない非正規僧が浄土宗寺院の開山となっているのである。表8によると、そのような僧の占める割合は、一〇〇ヶ寺以上の国に限定すると、紀伊八六％、近江六〇％、伊勢と和泉五五％、山城四八％、大和四六％、摂津四四％と、近畿地区の諸国が上位を占める。多くの寺院が創建されている近畿地区では、それだけの住職が

必要とされたが、供給が追いついておらず、非正規僧でも開山として迎えられたということになる。逆に下位には関東・東北地区の諸国が並ぶ。これは関東・東北に名越派も含めて檀林が所在していることと関係しているだろう。

ここでは寺院の開基、あるいは中興として名前を残している非正規僧のみを取り上げているが、開山でなくとも活動する非正規僧はこの数倍いたことが想定される。だからこそそうした僧侶が浄土宗を名乗ることに違和感を持つ宗内上層部がいたとしても不思議はない。

一六一五年の「浄土宗諸法度」はそのような状況の中で幕府から発布されたものであった。これは浄土宗のみではなく各宗派毎に出されたものではあるが、宗側の要望が反映されたものであることは既に明らかになっている（宇高二〇一六）。その中で先述の第一五条、私寺建立禁止条目は、正式な僧侶でないものが開山となることを拡大する寺院建立を抑制することが目的であったといえようが、その流れはすぐに止まらなかったのは述べたとおりである。さらに寺院を建立せずに地下に潜って活動する僧侶もいたように、第一六条では寺院でなく在家を借りての布教活動を禁止している。これも寺院に所属しないで活動する似非僧侶を排除することが目的で、実際にそうした僧侶の活動が問題となっていたと思われる。第八条では教義を深く理解していない勉強不足の者が名誉や利益のために法を説いてはならないとして、宗内僧侶に一定の修学を義務づけた。それができない「無智道心者」が十念を授けたり、血脈を道俗に授けたりすることがあったことが、第二六条からうかがえる。その場所も在家の借家であったろう。このような教義の理解不足以外にも、あえて教義を曲解したり、邪教を広めようとする「悪徒」の浄土宗僧侶もいたように、これに対しては第二七条で「魔民の所行」として、速やかな追放が謳われている。

第四章 「諸宗」との関係

「諸宗」つまり、他宗との関係の具体的な諸相を中世浄土宗の拠点地域のひとつである三河地域を素材にみてみよう。大樹寺開山勢誓愚底は一五〇一年「勤行惣目録」という掟書を制定した（『大樹寺文書』）。これは大樹寺での年間法要とその内容を、一日、一か月、一年に分けて書き上げたものである。一日は初夜・中夜・後夜を客殿で、晨朝・日中・日没は「仏殿」で行われた。その際には開基である松平親忠はじめ一族の回向があった。また晨朝や日中には鎮守での勤行もあった。そして毎月二八日には「沙弥・喝食」ら全ての僧侶が参加する勤行があり、そこでは荒神・熊野・天神などの諸神の法楽のため、回向・十念があった。さらに年間行事としては、一月二五日の法然の忌日にはその前七日間は法談と連夜不断念仏があった。二月一日には涅槃会、四月八日には降誕会があり、四月一六日から七月一五日の夏安居には始まりと終わりに特別な回向が勤められた。そして引き続き七月には孟蘭盆施餓鬼があり、門中の老若が参集して勤められた。浄土宗寺院として、京都では一四二九年に浄華院での孟蘭盆施餓鬼が確認できる（『建内記』永享元年七月一五日条）が、地方における中世の孟蘭盆施餓鬼が確認できる事例として貴重である。

また愚底には年不詳「大樹寺式定（開山自筆式定）」もある。そこでは大樹寺の寺内組織の一端が垣間見える。六条目では月行事、八条目では寮主が存在することが知られる。月行事があることは月単位で交代するほど多くの僧侶がいたということ、また寮主がいることは寺内に修行僧が常住し、学問を行う日常的な組織があったことを示している。つまり大樹寺も檀林としての機能を持っていたのである。さらには僧侶の日常生活の一齣として、茶を嗜

んでいたことが「大樹寺僧衆定書」からうかがえる。そこには鐘子・茶磨・茶盆・茶筌・茶酌（杓）の名が記載され、万一これらを紛失・破損した場合は自前の茶道具で弁済するとされている。禅宗寺院のように僧侶間での喫茶が浸透していることがうかがえよう。

また現存する浄土宗寺院として建立された最古の建造物である信光明寺観音堂には、釈迦を祀るために建立した旨の棟札があるが、当寺の縁起には釈迦を祀る建物は法堂であると記されている。縁起には外にも方丈・大庫裏・小庫裏・鐘楼・浴室・中門・惣門・開山堂などの建物があったことが記載されている。縁起自体は後世のものだが、これらの建物は禅宗寺院におけるものと同じである。先述の「勤行惣目録」での勤行の場所は、「仏殿」であり、「本堂」という呼称ではなかった。また「沙弥・喝食」も本来は禅宗寺院での呼称である。

さらに大樹寺には開山愚底の肖像画と木像が現存するが、手には払子を持ち、曲象に座っており、禅僧の姿と見分けが付かない。参考になるのが、一四八九年の『蔭涼軒日録』の記事である（『同』延徳元年二月二五日条）。この日將軍足利義政は、かねてより作製を命じていた九条袈裟を相国寺住持と知恩院珠琳に与えている。このことは禅宗僧侶と浄土宗僧侶が同じ九条袈裟を着用していたことを示している。

禅宗との共通点は外形面だけではなかった。僧侶の階梯を示す用語にも共通点がある。「東堂」「西堂」は、『禅学大辞典』によると、西堂は他山の前住で、東堂はその寺の前住を示す。一方浄土宗では主に浄華院関係の史料で確認できる。一四四一年一〇月、万里小路時房は、「浄華院に向かう、松林庵において、東堂・当住・無量寿院等、これに参会す」と浄華院で住職とは別人の「東堂」と出会っている。住職よりも先に書かれているので、より上位の人物、つまり前住となる。また一五四一年、浄華院の末寺であった金戒光明寺の「金戒光明寺制法」でもそれを制定したのは「東堂僧信」と「当住僧玉」であった。浄土宗でも禅宗同様「東堂」という呼称は前住を指していた

ことがわかる。西堂についても一五七五年六月、万里小路惟房三回忌にあたり、浄華院の松林院は天皇から西堂位に任命されていた。戦国期の西堂位は、制限のある地位ではなく、天皇とも対面できるような存在であった。こうした京都での禅宗と浄土宗の親近性が三河地方にも波及しているといえよう（伊藤二〇一五）。

このように三河浄土宗の内実を手がかりに、中世浄土宗と禅宗との親近性が指摘できる。それではこうした他宗との交流を外からどのようにみられていたのかを、天台真盛宗・真盛の手紙からをみてみよう。真盛は一四九三年一月三日付け河毛盛空入道宛の手紙（『真盛上人往生伝記』）の中で、「浄土の宗義、あるいは西山と号し安心を本とし、称名の行、疎かなり。信の、行を妨ぐ。あるいは鎮西と号し、称名形のごとくして、行の、信を妨ぐ。信行相応せずば、往生極楽なかなか望みなきか。その上威儀を調べ、声明をたしなみ、鏡・鉞を突き、厳儀を成し、諸宗に准ぜんとのみ振る舞わば、宗儀を知らず。易行道より難行道に趣くいたらくなり」（原文漢文）と記している。真盛は、浄土宗の中で鎮西義は、形だけの称名念仏で中身の信がなく、往生極楽は難しい、また立ち居振る舞いを正して、声明に親しみ、鏡・鉞を鳴らし、厳かな儀式をして、「諸宗」と同じようなことをしている、これは法然が説いた浄土の教えを正しく理解せず、まるで難行道の宗派のようだと批判しているのである。当時の浄土宗が、称名念仏を疎かにし、声明、鏡・鉞の伴う厳かな儀式に重きを置いていると真盛の目に映っていた。

それに関連して次の事例も参考になろう。これより先、一四五一年から五九年まで知恩院住職であった大普慶竺が知恩院安置の法然像に香衣を着させたことがあった（伊藤唯眞一九九七）。香衣とは宮中に参内の際に着用する壊色の衣のことで、これを着用するためには勅許が必要であった。慶竺自身、知恩寺住職であった一四四三年に勅許を得ている。つまり香衣は参内用のフォーマルな「威儀を調べ」た衣であった。その色衣を法然像に着せたというのである。このことを伝えるのは本願寺蓮如の側近空善が蓮如の言葉を記した「第八祖御物語空善聞書」であるが、

蓮如の夢に法然が出てきて、「ワカ衣スミソメニナシテ候へ、イマコソ一心専念ノ文ニハアヒカナヒ候へ」と述べたという。つまり法然の衣を墨染め（墨染）にすることこそが、立教開宗の文の趣旨に適っているというのである。蓮如の考えは、先の真盛の考えとも通底する。法然像が宮中に参内用の香衣を着用することは、すなわち「威儀を調えることになる。こうした当時の浄土宗の姿は、法然の考えとは違うということが両者の根底にあったのだ。後のことになるが、一六九六年に知恩院が大師号宣下を朝廷に申請した際、関白近衛基熙は「法然大師号の事、今何事か。法然をしてこのことを聞かしむれば、如何、如何」（原文漢文）と述べている（伊藤真昭二〇一四）。「法然の大師号はなぜ今なのか、法然がこのことを聞いたらどう思うか」ということだが、まさに真盛も蓮如もこうした思いであった。

慶應よりも先に一条派浄華院の等熙が一四二九年六月九日に香衣の勅許を得ているが、その際、「鎮西一流之正脈」たる浄華院の衆僧は歓喜している（『建内記』）。浄華院の僧侶達には香衣の勅許が名誉なことだとの認識があったことがわかる。また等熙には没後の一四六二年に浄土宗最初の国師号が追贈されている。また、地方においても一四五二年に常陸国常福寺が朝廷の祈願所となっている（『常福寺文書』）。幕府との関係も同様で、一五二六年、幕府は浄華院に「祈禱」を命じ、それ以後延暦寺僧とともに、將軍の「御加持衆」のひとりであった（伊藤真昭二〇〇六）。このように朝廷や幕府との距離を縮めていった一五世紀中葉は、遁世僧集団であったはずの浄土宗にとって「諸宗に准」じる出発点となっていた。

まとめ

中世浄土宗寺院は中世前期には山城・近江の京都近郊と、鎌倉のある相模近郊、そして名越派が展開した奥州を中心に寺院が展開していった。後期になるとそこに三河が加わった。三河は当初藤田派寺院が展開したが、了暁が三河に入ると白旗派に取って代わられるようになり、白旗派の一大中心地となっていた。戦国期になると、近江の浄厳院本末、三河の大樹寺本末、相模・武蔵では鎌倉光明寺本末が核となってそれぞれの地域で寺院が建立されていった。

戦国期は、法華一揆や一向一揆に代表されるように、法華宗や真宗寺院が武力闘争を伴う団結を示すことで勢力を増していったが、浄土宗も同様に戦国時代からそれまでの時期とは比較にならないほどのスピードで寺院が増加した。その背景にはこれまで葬儀の執行をてこに教団を成長させた禅宗の事例が指摘されてきたが、歴史人口学の研究成果によって明らかとなった、戦国期の人口増加にともなう経済発展の方がより説得的である。

また戦国期には通世僧集団であるはずの浄土宗が、他宗、特に当時京都で將軍家の庇護を受けていた禅宗と非常に近い存在になっていったし、朝廷や幕府との接近にも成功していた。そうした変容を外部からみていた蓮如と真盛は、浄土宗は法然の教えと乖離しているとして批判していた。

こうした変容がどのように影響していたのかは今後の課題であるが、戦国期以降、特に畿内・関東・東海・東北で寺院数が増え、浄土宗の存在感が増したことは確かであろう。しかし急激な拡大は質の悪い非正規僧の登場という負の側面をも生み出した。それへの対応策として、教団上層部は江戸幕府と協力しながら、寺院・僧侶の管理強

化に乗り出した。それが浄土宗諸法度の発布と寛永の本末改め、そして関東十八檀林による伝法の独占である。こうした諸制度は浄土宗僧侶の質を担保するものとなった。

参考文献

- 伊藤真昭「中世後期浄土宗における禪宗的要素」、竹貫元勝博士還暦記念論文集『禪とその周辺学の研究』、永田文昌堂、二〇〇五
- 伊藤真昭「中世浄土宗教団の特質」『佛教文化研究』五〇、二〇〇六
- 伊藤真昭「法然上人の遠忌と大師号勅許について」、『法然上人研究』第七号、二〇一四
- 伊藤真昭「浄土宗・法華宗・時宗の展開」、『愛知県史』通史編3 中世2・織豊、愛知県、二〇一八
- 伊藤毅「中世都市と寺院」、『日本都市史入門Ⅰ空間』、東京大学出版会、一九八九
- 伊藤唯眞「蓮如と知恩院」『講座蓮如』第四卷、平凡社、一九九七
- 宇高良哲「浄土宗寺院由緒書 解題」、増上寺史料編纂所編『増上寺史料集』第七卷、続群書類従刊行会、一九八〇
- 宇高良哲編『近世浄土宗史料集』、青史出版、二〇一九
- 宇高良哲「浄土宗諸法度の成立過程」、『佛教文化研究』六〇、二〇一六
- 岡崎市史料叢書編集委員会編『大樹寺文書 上』、岡崎市、二〇一四
- 河内将芳『日蓮宗と戦国京都』、淡交社、二〇一三
- 斎藤修・高島正憲「人口と都市化と就業構造」、深尾京司・中村尚史・中林真幸編『日本経済の歴史』第一卷中世、岩波書店、二〇一七
- 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局編『蓮門精舎旧詞』、続浄土宗全書第一八卷・第一九卷、一九七三
- 増上寺史料編纂所編『浄土宗寺院由緒書』、増上寺史料集第五卷、第七卷、一九七九、一九八〇
- 竹田聴洲『民俗仏教と祖先信仰』、東京大学出版会、一九七一

天台眞盛宗宗学研究所編『眞盛上人往生伝記』、色井秀讓ほか訳注、三重県郷土資料叢書 第36集、三重県郷土資料刊行会、一九七二

東京大学史料編纂所編『諸宗末寺帳』上下、大日本近世史料、一九九八

中井真孝「浄土宗の本末関係」、同『法然伝と浄土宗史の研究』、思文閣出版、一九九四

堀江登志実「史料翻刻 信光明寺所蔵『三河国浄土宗寺院由緒書』、岡崎市美術博物館『研究紀要』第五号、二〇一三

キーワード 中世浄土宗、蓮如、眞盛、寺院急増、僧侶の質低下